

群 教 セ	G 11 - 02
	平 22. 242集

小学校におけるキャリア教育の推進に 向けての調査研究

— キャリア発達《人間関係形成能力》と道徳の時間に視点を当てて —

長期研修員 田村 香世

《研究の概要》

本研究は、県内の公立小学校を対象とした実態調査を基礎資料として、小学校におけるキャリア教育推進と豊かな人間性の育成との関連性を探り、キャリア教育推進に向けての提案を行うことを目的とする。具体的には小学校におけるキャリア発達《人間関係形成能力》の児童の実態、教員の意識、キャリア教育に視点を当てた道徳の時間の状況を調査し、豊かな人間性の育成につながる小学校におけるキャリア教育推進の提言を行う。

キーワード【キャリア教育 豊かな人間性 調査研究 小学校 道徳】

I 研究の背景と目的

産業・経済の構造変化、雇用形態の多様化や流動化等を背景として、就職・就業をめぐる環境が激変している。また、最近の若者の離職率の高さやニート・フリーターの増加問題などから、勤労観・職業観の未熟さや職業人としての基礎的資質、能力の低下が懸念されており、若者の自立に関する問題が現代社会の課題の一つになっている。学校教育においては、将来の夢が描けず、学ぶ目的や意欲が欠如した児童生徒やコミュニケーション能力や自己肯定感をもてない児童生徒の増加も指摘されている。中央教育審議会答申では、現在の児童生徒における生命尊重の精神、自尊精神の乏しさ、基礎的な生活習慣の未確立、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、心の活力が弱まっていると指摘され、豊かな人間性の育成が叫ばれている。コミュニケーション能力の未熟さなどは、「豊かな人間性の育成」との関連が深いと考えられる。文部科学省の施策では、他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感や公正さを重んじる心、勤労観・職業観など、児童生徒に豊かな人間性と社会性を育むための教育の実現が目標とされている。キャリア発達諸能力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意志決定能力）は「豊かな人間性の育成」に大きく関与するものと考えられる。豊かな人間性を育成する上でキャリア教育の果たす役割は大きいと考える。児童生徒が身に付けた能力や態度を、現在および将来の選択や生き方にどのように生かしていくのかという視点に立って、学校教育を改善していくための研究をすることが必要であると考えられる。

1 現状と課題

(1) 先行研究の成果と課題

静岡県教育センター・長期研修員(平成19年度)は、中学校3校にキャリア発達能力の実態調査を行った。この結果、A中では「コミュニケーション能力」において生徒の評価は高いが、教員の評価が低い傾向が見られ、教員と生徒の意識の差が大きい傾向が見られた。具体的な努力目標を生徒と共有し、教育活動に取り組むことによって、生徒と教師の目指す方向が一致し、目標達成に向けて努力できるのではないかと提言されている。

大阪府教育研究所連盟(平成19年度)は、国立教育政策研究所が示しているキャリア発達に関わる4領域8能力の視点から、小学5年生と中学2年生にアンケート調査を実施した。小学生のアンケート項目の分析結果から「自己肯定感のある子どもは、まわりを見ることができ、やってみたくことははっきりと持っている」「将来について考える子どもは、他の学年の人と一緒に活動するのが好きである」など自己肯定感とコミュニケーション能力が様々な能力や態度の基礎となっている

ことが報告されている。これらを有効に組み合わせ、児童生徒のキャリア発達を促すように小・中学校9年間を見通した取組が必要であると提言されている。

(2) 問題の所在

① 児童生徒の実態

群馬県の全国学力・学習状況調査（平成20年）によると「自分には、よいところがありますか」では肯定的な回答は78.7%（小6）であった。「人の気持ちが分かる人間になりたいですか」では、93.6%（小6）であった。この2項目はキャリア発達《人間関係形成能力》との関連が深いと考える。群馬県教育振興計画ではこの2項目の達成目標を100%（平成25年）としている。「将来の夢や目標を持っていますか」では、86.3%が肯定的な回答であった。この項目の達成目標は90%である。群馬県の教育に関する県民アンケート（平成20年度）「心の教育に関して、子どもたちに一番身に付けてほしいことは何ですか」の1位は「自分のことだけを考えて行動するのではなく、家族や友達、周囲のことも考えて行動すること」（45.0%）であった。この項目も《人間関係形成能力》との関連が深いと考える。

② 過去の研究

群馬県総合教育センターでは「中学校・高等学校におけるキャリア教育の推進に向けた調査研究」（平成18年）を行った。中学3年学年主任を対象にしたアンケートの結果、キャリア教育で身に付けさせたい能力は《人間関係形成能力》の中の「コミュニケーション能力」、《将来設計能力》の「役割把握・認識能力」「計画実行能力」であり、これらの能力の向上を意識した取組が必要であると報告されている。「小学校におけるキャリア教育推進に向けての調査研究」（平成21年）では、キャリア教育全般についての教員の意識、学校による推進状況と学校内外の人材を活用した取組の実態、取組に対するキャリア教育としての意識が明らかになった。特に、学校外の人材活用については多くの学校で取組がなされているが、キャリア教育としての意識の差が単位によって大きいことや学校外の人材活用のみ注目し、全体的にその事前や事後指導が充実していないこと、学校外の人材活用を一過性のイベントとしてとらえている傾向が見られることが問題点として指摘された。

③ 調査の目標や方向性

キャリア教育の必要性が提唱されて数年経った現在、小学校における実態を調査することは、児童生徒の勤労観・職業観を育むために意義のあることと考える。本県ならびに静岡県や大阪府における先行研究の結果や群馬県の全国学力・学習状況実施調査・県民アンケートの結果、群馬県児童生徒の実態、県民の願いを踏まえ、群馬県の小学校でのキャリア教育に対する教員の意識、児童のキャリア発達《人間関係形成能力》の実態を調査する。

新学習指導要領では、道德教育の目標に「自己の生き方についての考えを深め」の文言が付け加えられている。人間としてという一般論ではなく、「自己の生き方」という言葉が道德教育に加えられ、キャリア教育の要素を含むことが明確に示されている。内容面でも、キャリア教育と関連の深い項目が加えられている。例えば、社会参画への意識を意図した項目が低学年から扱われるようになったり、3、4年生では1-(5)「自分の特徴に気付きよい所を伸ばす」が加えられた。この項目は、自己の生き方を大切に考え、多様な可能性を意識しながら自己理解することが重要であるとの考えを踏まえたものであり、キャリア教育の具体的な活動の一つである自己理解の活動と道德が密接に結びついている。道德教育もキャリア教育も学校の教育活動全体を通じて行うものであり、共通する点が認められる。将来における自分自身の生き方を考えるときに、キャリア教育の視点を盛り込みながら道德教育を展開することが望ましいのではないかと考える。

そこで、キャリア教育に視点を当てた道德の時間を調査し、それぞれの関連性を明らかにし、キャリア教育推進の改善方策を示していきたい。

④ 教育全体の流れや方向性

教育基本法の改正を踏まえ平成19年の学校教育法の改正では、義務教育の目標の一つとして「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する

能力を養うこと」が規定された。小学校学習指導要領では、総則の第4指導計画の作成に当たって配慮すべき事項として「各教科の指導に当たっては、児童が学習問題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること」と記載されている。平成21年3月には、国立教育政策研究所から小学校教員向けキャリア教育推進用パンフレットが発行されるなど、これまで以上に小学校でのキャリア教育の推進が求められている。

本県においては、「学校教育の指針」（平成22年度）の中で、豊かな人間性育成のための方策の一つにキャリア教育が挙げられている。組織的・系統的なキャリア教育の推進の手だてとして「発達段階を踏まえ身に付けさせたい能力・態度の明確化」「目標の実現のために必要な学習活動の体系化」が記載されている。

2 研究の目的

群馬県小学校でのキャリア教育に対する教員の意識や児童のキャリア発達《人間関係形成能力》の実態、キャリア教育と関連がある道徳の時間の調査を通して、キャリア教育を推進する改善方策を明らかにする。

II 仮説

児童に自分自身のよさに気付かせたり、様々な人々とのコミュニケーションの機会を多くもたせたり、体験したことを道徳的価値に結び付けたりさせることで児童のキャリア発達を促すことができる。

III 調査対象

- 1 調査対象校 群馬県内の公立小学校341校から標本抽出により36校を抽出
(市町村ごとの学校数に応じて抽出数を比例配分し、地域学校規模を考慮して対象校を選定)
- 2 調査対象者 5年生児童 1289名 小学校担任教師 414名

IV 調査内容

1 調査の基本的な考え方

本調査は、小学生のキャリア発達に関わる《人間関係形成能力》の実態ならびにキャリア教育に対する教員の意識やキャリア教育に視点を当てた道徳の時間を調査することにより、豊かな人間性の育成にかかわるキャリア教育の推進に向けた問題点と課題を把握することを目的とする。

2 具体的な内容

調査票は以下の質問項目によって構成されている

(1) 児童用

- ・キャリア発達《人間関係形成能力》の実現度、道徳の時間に関する意識調査
- ・キャリア教育と関連のある道徳の内容項目の意識調査
- ・職業に関する調査（なりたい職業、職業を決める上での考え、職業選択の情報源など）

(2) 教師用

- ・キャリア教育推進に関する重要度・実現度
- ・キャリア発達《人間関係形成能力》に関する重要度・実現度
- ・キャリア教育に視点を当てた道徳の時間に関する重要度・実現度、内容項目

V 調査の実施

1 調査票

アンケート調査（評定尺度法4点、多肢選択法、自由記述法）SQS方式によるマーク方式調査を実施

2 データ処理の方針と分析

処理方法：「学校評価支援システム」活用

分析：単純集計・クロス集計（ χ^2 検定で有意差を検定）、相関分析

VI 研究の結果

1 小学校キャリア教育に対する教員の意識について

図1、図2は小学校担任教諭にキャリア教育に対する意識についてアンケート調査した結果である。小学校でキャリア教育を進めることについて、「大変重要である」「やや重要である」と考えている教員は全体の95%に達している。また、豊かな人間性育成のためキャリア教育を推進することについても、96%の教員が重要ととらえている。キャリア教育の実践状況は「よくできている」「大体できている」と回答した教員を合わせると全体29%である。豊かな人間性育成のためのキャリア教育の推進状況も30%であった。担任する学年ごとの有意な差はなく、キャリア教育に対する意識や実現度は、担任する学年による差はない。キャリア教育に対する重要度の認識は高いが、実現度は十分ではないととらえている割合が多く、何らかの手立てが必要と考える。

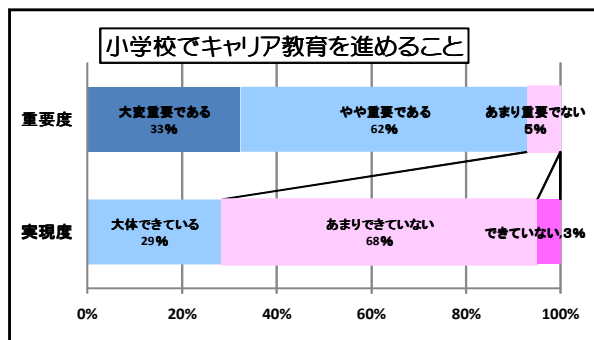


図1 教員アンケート結果: キャリア教育の推進

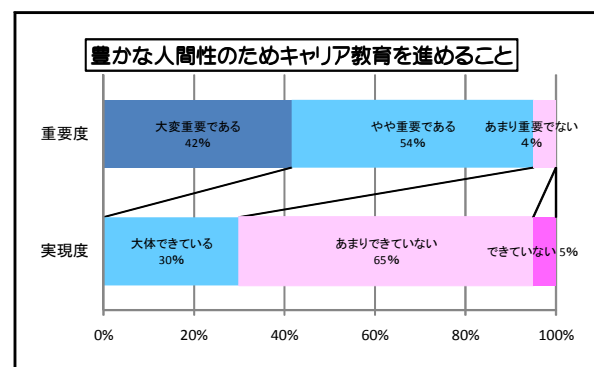


図2 教員アンケート結果: キャリア教育の推進

2 キャリア発達《人間関係形成能力》について

キャリア発達《人間関係形成能力》の意識調査を児童・教員に行った。アンケートの設問は、職業観・労働観を育む学習プログラムの枠組み（国立教育政策研究所）の「職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な態度・能力」を参考にした。

(1) 児童の結果

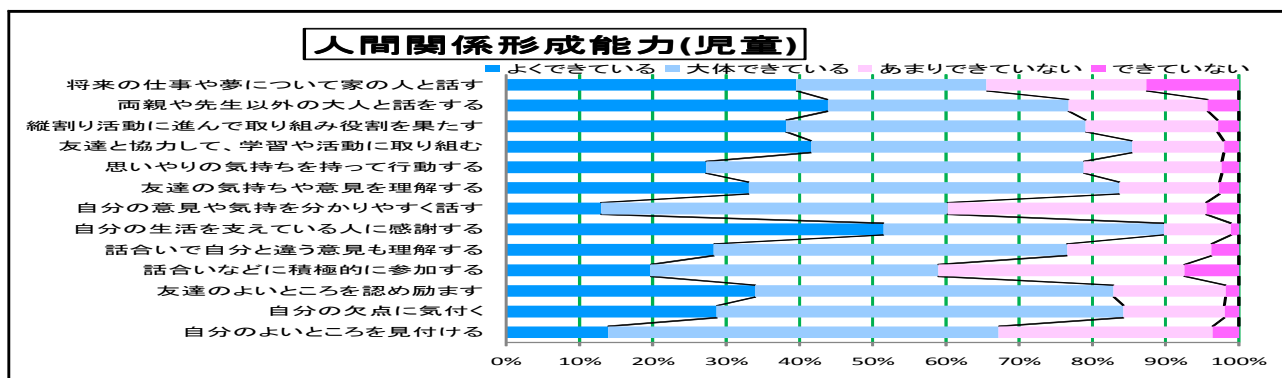


図3 児童アンケート結果: 人間関係形成能力

図3は児童アンケートの結果である。「友達と協力して学習や活動に取り組むこと」「友達の気持ちや考えを理解すること」「自分の生活を支えてくれている人に感謝すること」「友達のよいところ

を認め励ますこと」「自分の欠点に気付くこと」の項目では「よくできている」「大体できている」と答えた児童が80%以上いた。「友達」「自分の生活を支えてくれる人」など他者理解の平均値が高い。「自分の欠点に気付くこと」も肯定的な回答をした児童が80%以上いた。実現度（「よくできている」＋「大体できている」）の低い項目は「話し合いなどに積極的に参加すること」（57%）、「自分の意見や気持ちを分かりやすく話すこと」（61%）、「自分の将来の仕事や夢について家の人と話をすること」（63%）、「自分のよいところを見付けること」（65%）、「話し合いで自分と違う意見も理解しようとする」（73%）であった。実現率の低い項目のキーワードは「話し合い」「話をすること」であり、コミュニケーション能力の不十分さを自覚している児童が多いことがうかがわれる。「自分のよいところを見付けること」も実現率が低い。自分の欠点に気付くことのできる児童は多いが、「自分のよいところを見付けること」ができる児童は少なく、自己理解は十分ではないと言える。

図4は「将来就きたい仕事や夢がありますか」の項目で「ある」と回答した児童の平均値（よくできている4点、大体できている3点、あまりできていない2点、できていない1点）と「いいえ」と回答した児童の平均値を示したチャート図である。人間関係形成能力に関するすべての質問項目で将来就きたい仕事や夢がある児童群が、将来就きたい仕事や夢がない児童群より平均値が高い。「自分の将来の仕事や夢について家の人と話すこと」「自分のよいところをみつけること」「両親や先生以外の大人と話をすること」の3項目では特に両群の差が大きい。両群でクロス集計及び χ^2 検定を行った結果、将来就きたい仕事や夢のある児童群

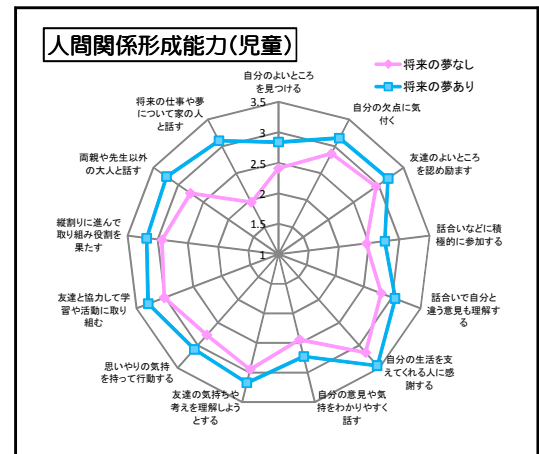


図4 児童アンケート結果:人間関係形成能力

は、人間関係形成能力に関するすべての質問において「よくできている」「大体できている」と答えた児童が有意に多く、「あまりできていない」「できていない」と答えた児童が有意に少ない。将来就きたい仕事や夢のない児童群は、「よくできている」「大体できている」と答えた児童が有意に少なく、「あまりできていない」「できていない」と答えた児童が有意に多いという結果が出た。「自分の将来の仕事や夢について家の人と話をすること」(χ^2 値199.12)「自分のよいところを見付けること」(χ^2 値64.86)、「親や先生以外の大人と話すこと」(χ^2 値50.27)の3項目では両群の差が大きい。

以上のアンケート結果から、将来就きたい仕事や夢の有無と人間関係形成能力は関連があり、人間関係形成能力の育成が将来の夢や希望をもつことにもつながると考えられる。自分のよいところを見付けるというプラス面の自己理解や友達だけでなく大人と話をすることを経験を豊富に持つことが、将来の自己実現に向け大切な要素だと考える。

「自分の将来の仕事や夢について家の人と話をすること」の項目の差が両群で顕著であることから、このような機会を意図的に作れば、将来就きたい仕事や夢のない児童群も、児童が将来の仕事や夢について関心を持ち始め、将来就きたい仕事や夢のある児童群は、継続的に将来について考えるのではないかと推察できる。また、コミュニケーション能力の向上を図る上でも大切なことではないかと考える。

ベネッセ教育研究開発センターが、仕事を持つ若者に行った調査(2006.1)では、普段の仕事において、将来の目標をもって仕事することに自信のある人や自分の考えをわかりやすく説明することが得意な人は、子どもの頃、「親と将来の話をしたり、親や教師以外の大人と話をしたりすることがあった」と回答している割合が多い。「自分の将来の仕事や夢について家の人と話をすること」「親や先生以外の大人と話をすること」は、成人してからの目標設定やコミュニケーションに対する自信にもつながっていくと考えられる。

(2) 教員の結果

人間関係形成能力に関する項目の重要度は「友達の良いところを認め励ますこと」(3.89)を筆頭に平均値はどの項目も高く3.4以上であった。実現度の高い項目は「友達と協力して、学習や活動に取り組むこと」(2.89)など児童の上位項目と同じ項目が多かった。実現度の低い項目は「自分の将来の仕事や夢について家の人と話すこと」(2.22)、「自分の意見や気持ちを分かりやすく話すこと」(2.28)であり、

キーワードは児童と同じ「話す」であった。

重要度と実現度の差が大きい項目は「自分の意見や気持ちを分かりやすく話すこと」(1.51)、「自分の将来の仕事や夢について家の人と話すこと」(1.38)であった。重要度と実現度の差が大きい項目もキーワードは「話す」であった。コミュニケーション能力は重要であると考えている教員は多い。しかし、目の前の児童のコミュニケーション能力の実態は十分ではないととらえている。

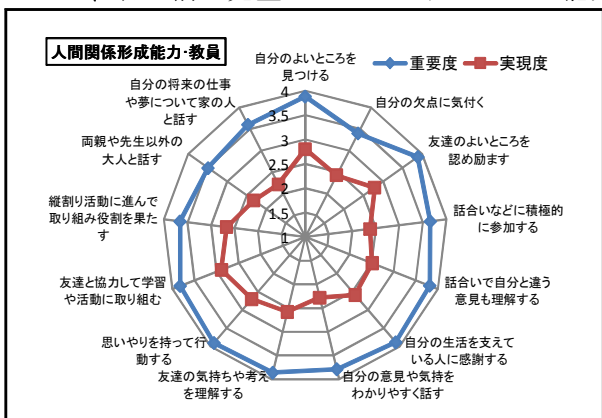


図5 教員アンケート結果:人間関係形成能力
(3) 児童と教員の比較

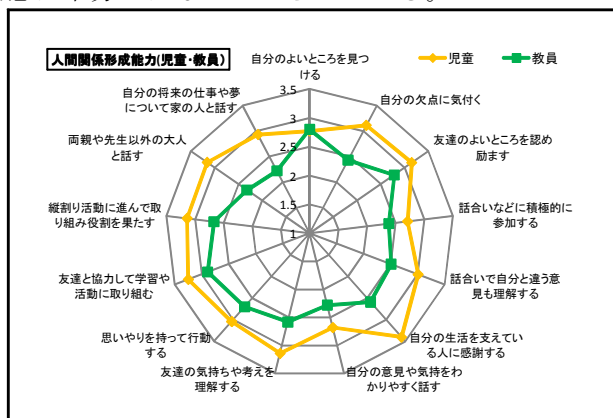


図6 児童・教員アンケート結果:人間関係形成能力

図6は、児童の自己評価と教員アンケートの実現度を比較したものである。「自分のよいところを見付けること」では教員の評価と児童の評価がほぼ同じ数値である。それ以外は教員の評価が低い傾向が見られる。「両親や先生以外の大人と話す」(差0.84)、「自分の生活を支えている人に感謝すること」(差0.81)において教員と児童の意識の差が大きい傾向がある。児童と教員の到達度に対する意識の差によるものではないかと考える。

3 キャリア教育の視点を取り入れた道徳の時間について

質問は、キャリア教育の視点を取り入れた道徳の授業を行う上で、日常的に行われやすい指導上の工夫点について設定した。

(1) 児童の結果

図7は、道徳の時間に関する質問の平均値(とても好き4点、好き3点、あまり好きではない2点、嫌い1点)と標準偏差のグラフである。「ゲストティーチャー

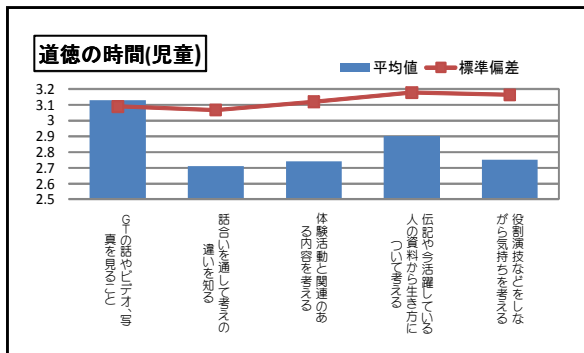


図7 児童アンケート結果:道徳の時間

(GT)の話やビデオ・写真などを見ること」「伝記や今、活躍している人の話を読み、生き方について考えること」の項目で平均値が高い。児童は現実を意識できる教材を好む傾向があることが明らかになった。項目ごとの標準偏差は大きなばらつきはないが、「伝記や今、活躍している人の話を読み、生き方について考えること」がやや大きい。個人差がやや大きいと言える。

将来就きたい仕事や夢の有無と道徳の時間に関する質問をクロス集計し、 χ^2 検定した結果、すべての項目で両群の人数比率の差は有意であった。将来就きたい仕事や夢がある児童群は、「とても好き」「好き」と答えている割合が有意に多く、「あまり好きでない」「きらい」と答えている児童が有意に少ない。反対に将来就きたい仕事や夢がない児童は、「とても好き」「好き」と答えている割合が有意に少なく、「あまり好きでない」「きらい」と答えている児童が有意に多い。「伝記や今、活躍している人の話を読み、生き方について考えること」(χ^2 値43.78)、「体験したことと関係のある内容を道徳の時間に考えること」(χ^2 値37.90)の項目の両群の差が特に大きい(資料編2参照)。

(2) 教員の結果

図8は、道徳の時間についての重要度・実現度の結果である。特に重要度の評価の高い項目は、「話し合い活動の工夫」(3.52)、「学校での体験活動との関連」(3.48)、「家庭や地域での体験活動との関連」(3.46)である。実現度は、重要度に比べると低い数値であるが、「学校で行われる体験活動との関連」

(2.59)、「教科との関連」(2.67)は比較的实现度が高い。体験活動の重要性が十分認識され、実践にも結びついていると考える。相関分析の結果、この三つの項目はやや強い相関(相関係数0.4以上)があることが明らかになった。つまり、キャリア教育に視点を当てた道徳の時間を行う際、学校での体験活動と関連付けて指導している教員は、家庭での体験活動や各教科とも関連付けて指導している傾向があることが明らかとなった(資料編2参照)。

以上の結果からキャリア教育に視点を当てた道徳の授業を行う上で「道徳の計画をキャリア教育の視点から見直すこと」の自己評価は低い、実際には体験活動や各教科と関連

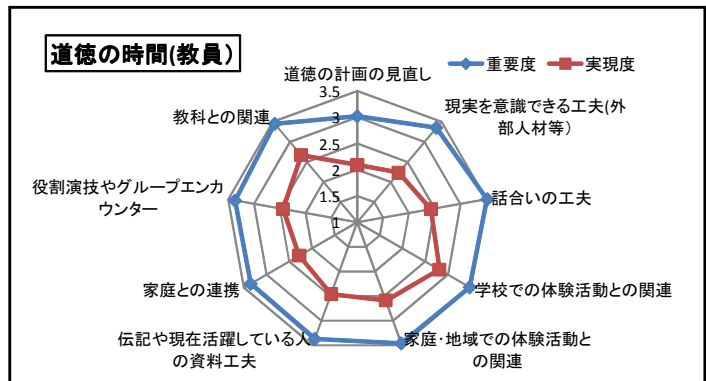


図8 教員アンケート結果:道徳の時間

付けて計画を見直しながら行われていることと考える。「ゲストティーチャーやビデオ等を利用し児童が現実を意識できる工夫」「道徳の授業の内容を家庭に知らせ連携を図ること」の項目は、重要度と実現度の差が大きい。「道徳の授業の内容を家庭に知らせ連携を図ること」については、児童アンケート「将来の夢について家の人と話をすること」の実現度とも関連すると思われる。

(3) 児童と教員の比較

図9は教員の実現度と児童の意識を比較したグラフである。「ゲストティーチャーや写真・ビデオ等を利用し児童が現実を意識できる工夫」について差(0.89)が大きい。「伝記や現在活躍している人の資料として扱い、生き方について考えさせること」の項目も差(0.43)が、やや開いている。児童は現実を意識できるゲストティーチャーや写真・ビデオ等の利用、伝記や現在活躍している人の資料を好む傾向があることが明らかになった。このように児童が現実を意識できる工夫に関する項目の教員の実現度は低く、児童の興味・関心との差が大きい。

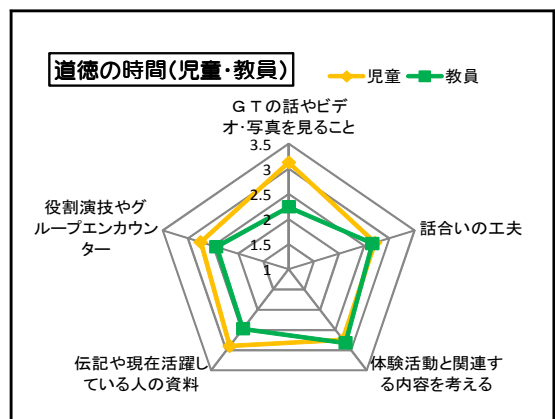


図9 児童・教員アンケート結果:道徳の時間

4 道徳的価値について

図10は、「児童は何から道徳的価値を得ているか」を集計した結果である。児童は自分の成功体験から価値を学ぶことが多く、全体の平均は35.4%である。自分の失敗体験から価値を学ぶことは、23.4%である。成功体験・失敗体験を合わせ自

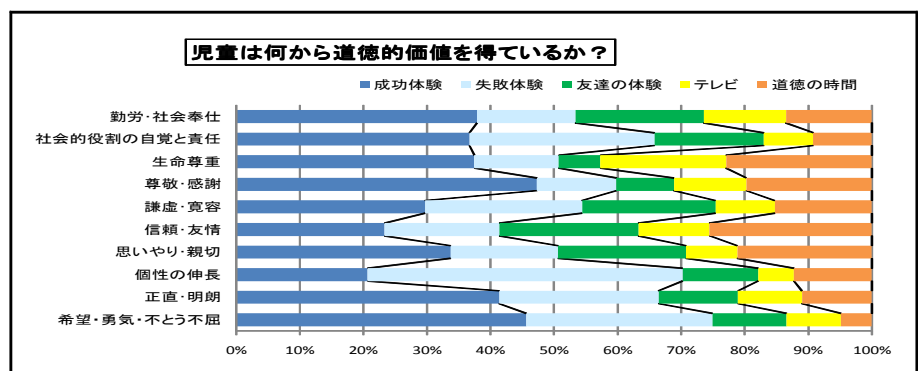


図10 児童アンケート結果:道徳的価値

分の体験から価値を得ることは58.8%である。友達の体験からを含めると74%に達し、児童は体験から価値を学ぶことが多いことが明らかとなった。内容項目別では、「希望・勇気・不とう不屈」の内容項目は成功体験から価値を得ることが多い、実際に自分の目標に向かって努力していく場面、例えば体育の鉄棒や跳び箱の授業において、希望をもつことの大切さや挫折感を克服する強さの大切さを体験から学び取るなどである。「個性の伸長」は失敗体験から価値を学ぶことが多い結果が出ている。このことは、人間関係形成能力のアンケート結果の中で「自分の欠点に気付く」で児童の自己評価が高く、「自分のよいところを見付ける」で評価が低いこととの関連があると思われる。失敗体験から自分の欠点に気付くことが多いのではないかと考える。「生命尊重」は体験から価値を学ぶことが少ない。これは、体験

する場が少ないことが要因であると考えられる。

図11は、将来就きたい仕事や夢の有無と何から道徳的価値を得るかをクロス集計したものである。 χ^2 検定の結果、両群の人数の差は有意であった。将来就きたい仕事や夢がある児童群は将来就きたい仕事や夢がない児童群よりも、自己の成功体験から価値を得る児童が多く、友人の体験やテレビから価値を得ることが少ない。将来就きたい仕事や夢がない児童群は、自己の成功体験から道徳的価値を得ることが少なく、友達の体験やテレビから価値を得ることが多い。

	将来就きたい仕事や夢の有無と体験活動				
	成功体験	失敗体験	友達の体験	テレビ	道徳
将来就きたい仕事や夢がある児童	3918▲**	2509	1551▽**	1080▽**	1663
将来就きたい仕事や夢がない児童	584▽**	466	383▲**	252▲**	314

▲有意に多い ▽有意に少ない 【 $\chi^2(4)=60.35, P<.01$ Phi=0.068**】 ** $P<.01$ * $P<.05$

図11 児童アンケート結果: 将来の夢の有無と体験活動

内容項目ごとにクロス集計した結果、「誠実・明朗」「生命尊重」「勤労・社会奉仕」では有意な差が見られなかったが、それ以外の項目では将来就きたい仕事や夢の有無で有意な差があった。将来就きたい仕事や夢がある児童群は、「個性の伸長」「信頼・友情・男女の協力」「尊敬・感謝」の内容項目で成功体験から価値を得ることが有意に多い。将来就きたい仕事や夢がない児童群は、「希望・勇気・不とう不屈」で友達の体験から価値を得ることが有意に多い。「謙虚・寛容」「社会的役割の自覚」はテレビから価値を得ることが有意に多い。児童自身の成功体験が道徳的価値に影響し、将来就きたい仕事や夢がある児童群は成功体験から価値を得ることが有意に多いことから、成功体験を道徳的価値に結び付けることがキャリア教育推進上から、大切なことではないかと考える(資料編2参照)。

5 職業選択に関する児童の考えについて

図12「職業選択の情報源」では、テレビ、映画、本、マンガなどメディアからの情報が最も多く児童の42%が情報源の1つに選んでいる。2位は「その仕事を実際に見て」(26%)、3位は習い事(19%)である。働く場面を実際に見ることは少なくなっている現代ではあるが、「その仕事を実際に見て」を選択した児童が全体の4分の1以上いることは、児童にとって実際に働く場面を目にすることが、強心に残っていると推察できる。

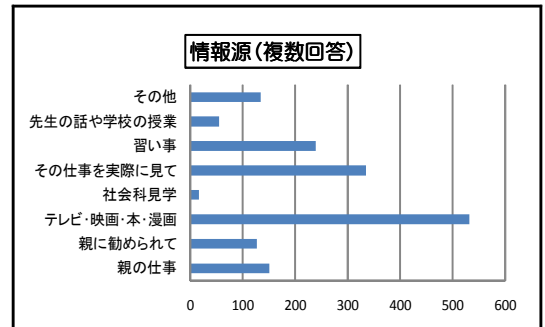


図12 児童アンケート結果: 職業選択

図13は「将来の仕事を決める時、どんなことを中心に考えますか」の質問に対する児童の結果である。「自分のやりたい仕事であること」を全体の77%の児童が選択している。「自分の個性や能力が生かせる仕事であること」は全体の半数近くが選択している。給料の高さや休みの多さなどではなく、自分の希望を実現したり、個性、能力つまり自分のよさを発揮したいと願う児童が半数近くいることが分かる。しかし、児童アンケート結果(図3)と比較すると、

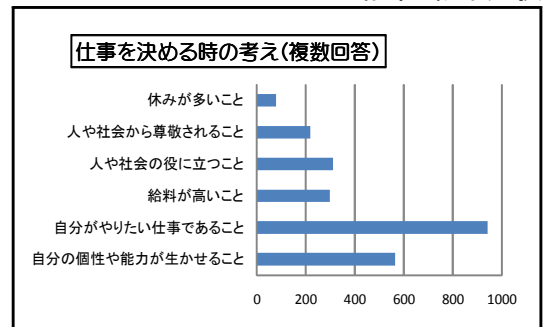


図13 児童アンケート結果: 職業選択

自分の欠点に気付くことのできる児童は81%いるものの、自分のよいところを見付けることは65%に留まっている。自分の個性や能力を生かすためには、まず、自分の長所や短所などを知る必要があるが、十分ではないことが明らかとなった。自分の希望や個性、能力を生かしたいと願いながらも、自分自身を見つめることが不十分な児童の姿が浮かび上がってきた。

図14は将来就きたい仕事や夢の有無と将来の仕事を決める時の中心となる考えをクロス集計し χ^2 検定を行った結果である。将来就きたい仕事や夢がある児童群は「自分のやりたい仕事であること」を選択した児童が有意に多く、「給料が高いこと」や「休

職業を決める上での考え	就きたい仕事や夢がある児童		就きたい仕事や夢のない児童		χ^2 値
	選択(人)	非選択(人)	選択(人)	非選択(人)	
自分の個性や能力が生かせること	508	567	84	116	
自分のやりたい仕事であること	861▲**	214▽**	123▽**	77▲**	33.1
給料が高いこと	233▽**	842▲**	81▲**	119▽**	32.2
人や社会の役に立つこと	277	798	45	155	
人や社会から尊敬されること	192	883	33	167	
休みが多いこと	52▽**	1023▲**	33▲**	167▽**	36.9

▲有意に多い ▽有意に少ない ** $P<.01$ * $P<.05$

図14 児童アンケート結果: 職業選択

みが多い」を選択した児童が有意に少なかった。また、将来就きたい仕事や夢がない児童群は「自分のやりたい仕事であること」を選択した児童が有意に少なく、「給料が高いこと」や「休みが多い」を選択した児童が有意に多かった。このことから、将来就きたい仕事や夢がある児童群は、給料の高さや休みの多さという働く動機として副次的な目的の価値観が低く、自己実現を果たそうとする意欲が高い児童の姿が浮かび上がり、将来に就きたい仕事や夢のない児童群は、給料の高さや休みの多さといった副次的な目的の価値観が強く、本来の働く意義に気付いている児童が少ない傾向がある。

将来就きたい職業ベスト10		
ベスト	職業	割合(%)
1	サッカー選手	8.8
2	野球選手	7
3	保育士・幼稚園	6.3
4	パティシエ・ケーキ屋	5.2
5	芸能人	4.4
6	医師	3.3
7	研究者・学者	3.2
8	学校の先生	3.1
9	漫画家	2.6
	大工	2.6
11	デザイナー	2.4
	看護師	2.3

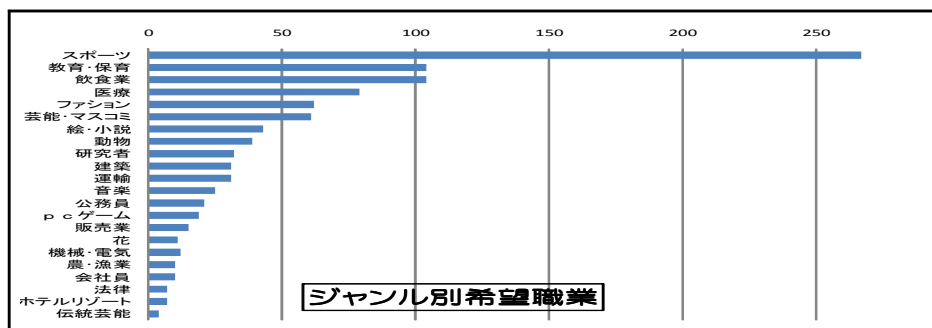


図15 児童アンケート結果

図16 児童アンケート結果:希望職業

図15は「あなたが一番なりたい職業を書いてください」という設問の記述結果である。回答欄には約200種類もの多様な職業が記述されていた。ベネッセや第一生命の全国規模の調査と比較するとサッカー選手、野球選手、保育士、幼稚園の先生などが上位を占め全国調査と同じ傾向が見られた。図16・ジャンル別での割合ではサッカー選手・野球選手を始めスポーツ関係が多く全体の27%を占めている。スポーツ関係の職業は種類も多く40種類の記載があった。「教育・保育」と「飲食業」が11%ずつの割合を占めている。医師、看護師、薬剤師など医療に従事することを希望している児童は、全体の8%である。回答欄には、職業名だけでなく「お母さんがお花屋さんで働いていてすごいと思ったので(就きたい職業：花屋)」、「子どもに喜んでもらいたいから(就きたい職業：絵本作家)」、「人を助け、人の命を守りたい(就きたい職業：消防士)」などその職業を目指した理由や「生活に役立つ機会やロボットを作る人」、「星新一さんのような立派な短編小説作家になりたい」、「小学校の音楽の先生」など将来目指す姿が具体的に記述されているものもあり、アンケート用紙から将来の目標をしっかりと見据えた児童の生き生きとした姿を想像した。

Ⅶ 研究の考察

1 キャリア教育の推進と人間形成能力の育成

図1から図7の調査結果から、群馬県児童に望ましい勤労観・職業観を身に付けさせるためには、コミュニケーション能力や自分のよさを見付けることを特に指導していく必要がある。

コミュニケーション能力に関する項目の中でも特に「両親や先生以外の大人と話すこと」「自分の将来について家の人と話をすること」は、将来就きたい仕事や夢がある児童群と将来就きたい仕事や夢がない児童群での差が大きい。児童にとって身近な友達や先生はもちろんのこと、社会科見学等の相手先の方やゲストティーチャーとのコミュニケーション活動の時間を設定するなど、今の活動の中から洗い出して工夫を加えることが大切ではないかと考える。また、道徳等で生き方や勤労について学習をした際に、通信等で家庭に知らせ話し合いを促すなど、自分の将来について家の人と話をするチャンスを沢山作ることが大切である。

「勤労観・職業観」を育てることは、なりたい自分を思い描くことでもある。未来を思い描くためには自己理解を促進し現在の自分を明確にすることが大切ではないかと考える。児童が学校、家庭、地域の様々な体験活動の中で、その一員としての役割を果たすことなどを通して、自分のよさや得意分野に気づき、それを今後生かしていこうとする意欲や態度をもつことが大切であると考え。自己理解は他者とのかわりにおいて促進されることを考えれば、家族、友達、先生はもちろんのこと体験活動の中で様々な人とふれ合うことを通して自分のよさに気付くことが望ましいと考える。

2 キャリア教育に視点を当てた道德の時間

図8から図16の調査結果から、キャリア教育に視点を当てた道德の時間を行う際、以下の事項を特に配慮すべきであると考えている。

(1) 「児童が現実を意識できる工夫をすること(外部人材、ビデオ、写真等)」や「伝記や現在活躍している人を資料として扱い、生き方について考えさせること」である。児童はこの2点を好むことが明らかになった。教員の実現度は低く、児童の興味・関心との差が大きい。今回の改訂で道德の副読本でもイチロー、毛利衛など現在活躍している人物が扱われている資料の数が多くなってきた。また、伝記のシリーズものでも近年活躍していた人物の本を読みたがる児童の傾向を踏まえ本田宗一郎、手塚治虫なども加わったが、ナイチンゲールのような定番の人気も根強い。どれだけ自分の信念を貫いたか、欠点も含めて人間的にとらえられるかをもとに人選されていると報道されている(朝日新聞22/11/14)。このような情勢と児童の実態を踏まえ資料選定をすることが、小学校のキャリア教育の目標の一つである「夢や希望、憧れるイメージの獲得」の達成につながるのではないかと考える。

今の自分を知り、なりたい自分を描く過程の中でそのモデルとなるような人物との出会いは児童にとって不可欠のことである。両親や学校の先生以外の大人と出会う機会を大切にとらえ、道德の時間と結び付け、児童により貴重な体験となるよう教師が意識することが重要であると考えている。

(2) 成功体験が道德的価値に影響し、将来就きたい仕事や夢がある児童群は成功体験から価値を得ることが有意に多いことから、成功体験を道德的価値に結び付けることがキャリア教育推進の上から、大切なことではないかと考える。キャリア教育の取組には、児童生徒の発達全体を見直し、適時性や系統性が求められる。そのことからすると小学校担任は学校や地域・家庭で行われる活動を道德の時間に効果的な時期を選んで結び付けることができると考える。

Ⅷ 調査研究のまとめ

1 成果

調査研究を通して、キャリア教育に対する小学校担任教員の意識、小学校5年生児童のキャリア発達に関わる《人間関係形成能力》の実態並びにキャリア教育に視点を当てた道德の時間の実態を把握することができた。この結果を基に、児童の実態に即したキャリア発達を促す指導方法のポイントが明確になった。

<p>提言 望ましい勤労観・職業観を身に付けさせるため</p> <ul style="list-style-type: none">○ コミュニケーション能力を特に指導していく必要がある。○ 様々な人とふれ合うことを通して自分のよさに気付かせる。○ 道德の時間では、児童が現実を意識できる工夫(外部人材、ビデオ、写真等)をしたり、伝記や現在活躍している人を資料として扱ったり、生き方について考えさせることを意図的に行う。○ 自己の体験(学校や地域、家庭での体験)を道德的価値に結び付ける。 <p>以上の提言を踏まえ、キャリア教育に視点を当てた道德指導案を作成した。(資料編3参照)</p>
--

2 課題

今後は、作成した道德指導案を実践し、検証していきたい。また、道德の時間を要として位置付け、教科・領域へと横断的に関連付けてキャリア教育を行っていくことが必要であると考えことから、体験活動や教科等の学習を道德の時間を中心としたパイプでつなぎ、現在の教育活動を見直し、調査で明らかになったキーワードをもとに関連性やつながりに注目しキャリア教育を実践していきたい。

<参考文献>

- ・文部科学省『小学校キャリア教育の手引き』(2010)
- ・三村 隆男 著 『小学校キャリア教育のカリキュラムと展開案』 明治図書出版社(2006)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター『「キャリア教育」資料集 研究・報告書・手引き編』(2009)